

## 環日本海の自然 デスモスチルス

この骨格は、2800～1,100 万年前に太平洋の海岸部に生息していたデスモスチルスという哺乳類を再現したものだ。個々の標本の大きさは異なるが、平均体長 1.8 メートル、体重約 200 キロのデスモスチルスは、小さめのカバに似ていたと考えられている。

デスモスチルスの学名はギリシア語で「束ねられた (*desmos*) 柱 (*stulos*)」を意味し、束ねられた 7 本の円柱のように見えるその特異な臼歯から名付けられている。日本で最初に発見されたデスモスチルスの化石の臼歯は、ここ島根県の宍道湖の湖畔で見つかった。

約 2,000 万年前の中新世初期に、比較的穏やかな気候の中で日本海は広大で浅く広がっていた。この条件は、水生植物を餌として日中を水中で過ごすことが多いデスモスチルスにうってつけだった。2013 年に行われた研究によると、他の水陸両生のカバとは異なり、デスモスチルスは完全に水生だったという。この推測は陸生動物よりも骨が低密度で、そのため泳ぎに適しているという骨格に基づいている。

束柱目は絶滅してしまっているため、デスモスチルスについての詳細を知ることには困難である。しかし、化石から少なくとも *D. hesperus*、*D. coalingensis*、*D. Japonicus* の 3 種類がいたことはわかる。